

生物多様性研究分科会
～飯南町の自然資源の重要性とその活かし方～

大 嶋 辰 也

1. はじめに

今年度の研究テーマは、「自然環境に配慮した工法」、「豊かな自然環境を活かした地域の取り組み」であり、本稿では後者の活動について報告する。

対象地は飯南町であり、赤名湿地性植物群落（島根県自然環境保全地域）、飯南町森林セラピー（島根県県民の森で実施）を視察した。本報告では、各対象地の現地視察の結果を報告するとともに、飯南町の自然環境の地域資源としての活用方法について考察した。

2. 現地視察の概要

現地視察の実施状況は、表-1 に示すとおりである（位置は図-1 参照）。赤名湿地性植物群落では、湿地の概要や保護活動の取り組み状況等について、地元の方に解説していただいた。森林セラピーでは、当初、紅葉の山々をベースに森林セラピーを体験する予定であったが、天候不良等により視察時期が延期され、結果的に冬季の12月となった。また、視察時は荒天であったため、森林セラピストとの意見交換会に企画変更した。森林セラピーは降雪時でも可能である。

表-1 平成24年度の活動概要（飯南町現地視察）

12月15日	概要	備考
10:00～11:30	○ <u>赤名湿地性植物群落（現地視察）</u> ・植物群落や周辺環境の解説 ・地元保護活動の取り組み状況の解説 等 ・簡易水質測定（ECのみ）	講師：安原征治氏 （森の案内人）
11:30～13:00	移動、昼食（ミセスロビンフットにて）	薬膳料理
13:00～16:30	○ <u>飯南町森林セラピー（意見交換会）</u> ・森林セラピーとは？ ・飯南町森林セラピーの取り組み 等	講師：玉野英敬氏 （森林セラピスト）



図-1 現地視察の対象地

3. 赤名湿地性植物群落（現地視察）

3-1. 赤名湿地性植物群落の概要

赤名湿地性植物群落は、昭和 40 年に当時赤名中学校教諭であった杵村喜則氏により発見され、飯石郡飯南町下赤名福田地内の山域にある用水溜池（名称長尾池）を中心に東西に広がる沼沢地に発達した県下最大のハンノキ林と、その林下に生育する貴重な湿性植物で特徴づけられている（図-2 参照）。

現在、島根県自然環境保全地域に指定されているほか、表-2 に示すとおり、動植物のみならず、自然景観、地形地質などの多面的な観点で評価されている。



図-2 赤名湿地性植物群落の位置図

表-2 赤名湿地性植物群落の指定等の状況

件名	内容
島根県自然環境保全地域 (島根県自然環境保全条例、 島根県)	・昭和 52 年 11 月 1 日指定 (第 1 号案件) ・面積：30.18ha (内、特別地区：8.01ha) ※ うち、野生動植物保護地区：0.67ha ・指定動植物：植物 21 種、動物 3 種
日本の重要な湿地 500 選 (環境省)	・選定基準 2：希少種、固有種等が生育・生息している。 ・選定基準 3：多様な生物相を有している。
特定植物群落 (自然環境保全基礎調査：環 境省)	・選定基準 D：砂丘、断崖地、塩沼地、湖沼、河川、湿地、高山、石 灰岩地等の特殊な立地に特有な植物群落または個体群で、その群落 の特徴が典型的なもの。
日本の植物群落 RDB	・赤名のハンノキ林
日本の自然景観	・湖沼景観 (湿原)：赤名湿地
山陰・島根ジオサイト 100 選	・島根地質百選選定委員会

3-2. 既往の調査・取組

赤名湿地性植物群落は、島根県自然環境保全地域の指定に先立ち、地形地質、植物、動物、森林の観点から学術調査が行われ、「自然環境保全地域学術調査報告書（候補地）」（島根県）にとりまとめられている。その後、当該地区の本格的な調査は行われていないが、平成 19 年 3 月に「島根県立三瓶自然館研究報告」の中で調査結果の中間報告が行われている。近い将来、最新の学術調査結果が発表されるものと考えられる。また、花粉分析の観点からの調査が行われており、日本花粉学会会誌に「岡山県蛇ヶ川湿原周辺における後氷期中期以降の植生変遷」（高橋光、1997）の論文として発表されている。

保護活動は、地元保護育成会を中心に、継続的に実施されているが、島根県により「赤名湿地性植物群落自然環境保全地域再生事業」が平成 14 年度を中心に実施され、木道の延長、看板や各種案内板の設置、植物名札の更新などが行われた。また、現在は、毎年 6 月に「赤名湿地性植物群落の保護活動」として、ヨシなどの陸化を早める植物の除去などが行われている。

なお、平成 24 年度内に、赤名湿地性植物群落に関するこれまでの保護活動の取り組みをまとめた本が、杵村先生をはじめ地元保護育成会により刊行される予定であり、ここで紹介する。

3-3. 現地視察

現地視察前に降雪があったため、湿原内には10~20cm程度の積雪があり、また、小雨もちらついていた。この厳しい条件にも関わらず、森の案内人である安原征治氏には快く現地を案内していただいた。以下に、現地視察結果と、安原さんのお話をまとめて記す。

1) 駐車場（エントランス）

国道54号から赤来中学校の横を通過し、案内標識どおりに行くと、湿地性植物群落の駐車場に到着する。駐車場は広く、「ここから徒歩約3分」と記された案内看板が設置されている。駐車場から湿原方面を望むと、スギ植林地内を通過する散策路がみられ、案内看板があるにも関わらず、この先に湿地があるとは想像しにくい。



2) 駐車場と湿原植生の間（移動経路）

駐車場から湿原植生までの距離は約400mであり、その経路にはスギ植林地を中心とした森林植生が広がる。一部で管理の行き届いた竹林がみられ、冬の厳しい時期ではあるが、幻想的な光景をみる事ができた。安原氏によると、この植林地は戦後に植林されたものであるが、周辺の林が生活林（薪炭林）として利用されていたため、植林面積は小さく、谷の入り口付近に集中しているとのことであった。この植林地をぬけると、平坦な耕作地がみられる。耕作地の先はもうハンノキが生育する湿地であるが、積雪により湿原植生があるようには見えない。耕作地を通過すると、湿地に続く木道が現れる。



3) 様々なサイン

遊歩道や湿地、点在する休憩所には、様々な標識が設置されている。



4) 湿原植生

赤名湿地性植物群落の一角は、基盤となる花崗岩閃緑岩の上に3万年以前の三瓶火山の噴出物が覆い、それが滞水層となり、表層水が地下水化して湿地が形成されたと考えられている(図-3 参照)。湿地には厚く植物遺体が堆積する。

湿地は、ハンノキ林(低層湿原)、開放湿原(中間湿原)に区分される。「自然環境保全地域学術調査報告書(候補地)」(島根県)で示された過去の現存植生図をみると(図-4 参照)、周辺の森林の林相には変化があると考えられるが、湿地自体の位置に大きな変化はみられない。湿原内には、踏圧等による植生への影響を低減するための木道が設置されているが、1名が通行できる低度の幅であり、所々で、人がすれ違うためのスペースが設置されている。

ハンノキ林は、この湿地のメインとなる環境であり、林床にはキセルアザミ、カサスゲ、サワギキョウ、リュウキンカ、ハンカイソウなどが四季折々に花を咲かせている。毎年行われている除草作業は、このハンノキ林を対象に実施されている。

開放湿原は、イヌノハナヒゲを主体とした中間湿原であり、小面積ながらサギソウ、トキソウなどの野生ランや、モウセンゴケ、ミミカグサなどの食虫植物などがみられる(島根県HPより)。開放湿原は、貧栄養な立地に生育する種が生育し、斜面に続く緩傾斜地に成立しており、ハンノキ林とは異なる要因により成り立っていると考えられる。

なお、簡易水質計でECを測定したところ、ハンノキ林、開放湿原とも、 $57\sim 59\mu\text{S}/\text{cm}$ を示しており、湿地が維持される条件とされる $55\mu\text{S}/\text{cm}$ より若干高い値であった。

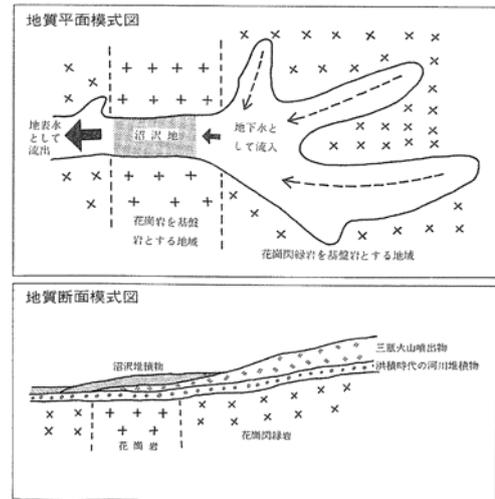


図-3 湿原植生の構造

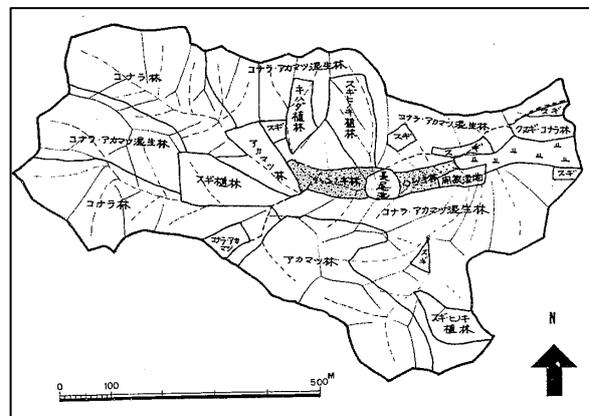


図-4 現存植生図(島根県資料より)



4) 長尾池

長尾池には、ミツガシワ（分布の南西限）、ジュンサイなどが生育しており、ため池上流側のハンノキ林と連続する環境となっている。

湖岸にはヨシがみられるものの、群落の規模は小さい。簡易水質計でECを測定したところ、35~45 μ S/cmを示しており、湿地内よりかなり低い値であった。「赤名湿地性植物群落自然環境保全地域再生事業」の時に、休憩所と合わせて、ミツガシワ等の移植が行われたようである。



5) 周辺の林（自然観察植物園・山野草の森）

湿地の北側に隣接する林は、自然観察植物園「山野草の森」として整備されており、40~50分の散策コースとなっている。このコースは、地元の方により看板の設置や管理が行われている。

コース中にはモリアオガエルの産卵がみられる場所もあり、雑木林から人工林などの、湿地周辺の里山環境を観察できる格好のコースとなっている。

安原氏によると、湿地周辺は薪炭林として、草刈り場、炭焼き場として利用されてきた。コナラ・クスギを中心とした林で、30~40年周期で伐採されていたようである。また、林床ではシイタケ栽培が盛んに行われるようになった。コウタケなどのキノコ類が豊富である。一方、アカマツ林が少ないためか、マツタケは少ない。



6) その他

その他、安原さんのお話しから、興味深い話しを一部紹介する。

- ・昔、小作する時は、山とセットで水田が与えられた。「芝刈り→牛のエサ→肥やし→作物」というサイクルがまわるよう、配慮されていたらしい。また、水田1反に対して山1反というように、小さく区切られていた。
- ・以前、俳優の柳生博さんが訪問された際に、「ここは尾瀬よりすばらしい。この狭い面積の中に、湿原だけでなく、里山の環境が全て入っている」との感想を述べられた。
- ・ここは、広島バス会社のツアーである「海潮温泉と赤名湿地をめぐる旅」など、森林セラピーコースの一部として利用されている。また、県内のリピーターもいる。
- ・今年の2月頃、これまでの保護活動等についてとりまとめた本を出版する。これは、森林文化を含めてとりまとめるものであり、効果的な観光資料になると思う。
- ・この地区では、昔、鉄道の計画があった。出雲大社と広島宮島を結ぶ大宮鉄道である。大社から立久恵までは建設されたが、その後、どうなったかわからない。
- ・付近の環境は弥生の頃とあまり変わらない。当時から以外と山裾まで人が住んでいた。県民の森付近では、戦国時代からタタラのために山に入って生活しており、明治のはじめ頃まで一大集落があった。寺小屋もあったらしい。
- ・問題点としては、地元の高齢化があげられる。

4. 飯南町森林セラピー

4-1. 森林セラピーとは？

森林セラピーとは、森林浴が“癒される、気持ちがいい”などの感覚的なものであるのに対して、森林浴の癒し効果を「医学的・科学的」根拠に基づく行動により、森林環境を利用して心身の健康維持・増進、疾病の予防を目指すものとされる。ドイツでは「クナイブ療法」という自然療法の一環として、森林セラピーが社会保険の適用を受けて行われる。検証されている森林浴効果を表-3に、ストレスの生活習慣病との関係を表-4に示す。

表-3 検証された「森林浴効果」

1. ストレスホルモンが減少する。
2. 副交感神経活動が高まる。
3. 交換神経活動が抑制される。
4. 収縮期・拡張期血圧、脈拍数が低下する。
5. 心理的に緊張が緩和し活気が増す。
6. NK活性が高まり免疫機能が上がる。
7. 抗がんタンパク質が増加する。

※(独)森林総合研究所、千葉大学環境健康フィールド科学センター、日本衛生学会森林医学研究会による

表-4 ストレスと生活習慣病等との関係

- ◎治療効果、予防効果が証明されたもの。
高血圧、狭心症、心筋梗塞、消化性潰瘍、過敏性腸症候群、うつ・不安障害、更年期障害、円形脱毛症、アルコール依存症、パニック障害、摂食障害
- 治療効果、予防効果が示唆されたもの。
肥満、糖尿病、高脂血症、慢性閉塞性肺疾患、喘息、著患のない人

※参考：(社)日本内科学会認定内科専門医会

4-2. 飯南町森林セラピーの概要

1) 目的

当初は飯南町民の健康維持・増進を目的としていた。しかし、尾道松江線の開通に伴い飯南町に訪れる人の減少が予測されることから、森林セラピーを飯南町の活性化策の一環として位置付けられることとなった。

2) 経緯

平成19年3月にNPO法人森林セラピーソサエティ(林野庁→国土緑化推進機構→現行)により、森林セラピー基地の認定を受けた。その後、ガイド育成、モニターツアー等の準備を開始し、平成20年4月にグランドオープンした。全国には48の森林セラピー基地があり、中国5県では5箇所が認定されている。島根県内での認定箇所は、飯南町森林セラピーの1箇所のみである(図-5参照)。

3) 運営

(株)フロンティアあかぎ(第3セク)により運営され、スタッフは、森林セラピー担当3名、地域おこし協力隊2名の計5名体制である。また、セラピーガイドは55名が認定を受けている。



図-5 全国の森林セラピー基地

4-3. 飯南町森林セラピーの内容

1) セラピーの内容

森林セラピーは、森林セラピストが利用者との面接によって計画したスケジュールに基づき、林内に設定された4つのコースを基本に、森林セラピーガイドが案内する（図-6 参照）。各コースの特徴は図-6 に示すとおりであり、県民の森の特徴を活かして設定されている。なお、利用料は、全て込みの料金でガイド1名あたり7,500円である。

<p>森林セラピスト</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. インテーク（面接） 2. ボディーチェッカー（ストレス測定機器） 3. POMS（気分プロフィール検査） 4. 血圧・脈拍測定、血中酸素濃度測定 5. 散策スケジュールの策定 											
<p>森林セラピーガイド</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. セラピーロードをガイド ※飯南町では6名以下/ガイドを基本 2. 必須事項 深呼吸、複式呼吸、お茶T I M E + お菓子（客の話しを聞く）、座観、五感にやさしい刺激（ゆっくり歩く） ※10～30分程、必ず1人になる時間をつくる。 3. その他、要望に合わせて 植物観察、ノルディックウォーク、ウォーキング、トレッキング、ハンモック、ハンドマッサージ、足裏健康法 など 											
<table border="1"> <thead> <tr> <th>コース名</th> <th>特徴</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>小田川コース （距離：約720m）</td> <td>清流小田川の水音を聞きながら、斜面に生えた四季折々の植物を間近に観察できる。森の案内人の説明を聞きながら楽しめる平坦なコース。</td> </tr> <tr> <td>きのお園コース （距離：約80m）</td> <td>植林内の林床に整然と並ぶシイタケの「ほだ木」の間から里山を感じることができるコース。</td> </tr> <tr> <td>才谷コース （距離：約460m）</td> <td>スギ・ヒノキの針葉樹林から広葉樹が現れはじめ、混交林の様相を呈する。森林の変化を感じることができるコース。</td> </tr> <tr> <td>山野草コース （距離：約550m）</td> <td>自然との一体感を最も感じる事ができるコース。座観に適したポイントが多く、小川のせせらぎや樹冠より差し込む光、森の息吹に包まれる感触を味わえる。</td> </tr> </tbody> </table>		コース名	特徴	小田川コース （距離：約720m）	清流小田川の水音を聞きながら、斜面に生えた四季折々の植物を間近に観察できる。森の案内人の説明を聞きながら楽しめる平坦なコース。	きのお園コース （距離：約80m）	植林内の林床に整然と並ぶシイタケの「ほだ木」の間から里山を感じることができるコース。	才谷コース （距離：約460m）	スギ・ヒノキの針葉樹林から広葉樹が現れはじめ、混交林の様相を呈する。森林の変化を感じることができるコース。	山野草コース （距離：約550m）	自然との一体感を最も感じる事ができるコース。座観に適したポイントが多く、小川のせせらぎや樹冠より差し込む光、森の息吹に包まれる感触を味わえる。
コース名	特徴										
小田川コース （距離：約720m）	清流小田川の水音を聞きながら、斜面に生えた四季折々の植物を間近に観察できる。森の案内人の説明を聞きながら楽しめる平坦なコース。										
きのお園コース （距離：約80m）	植林内の林床に整然と並ぶシイタケの「ほだ木」の間から里山を感じることができるコース。										
才谷コース （距離：約460m）	スギ・ヒノキの針葉樹林から広葉樹が現れはじめ、混交林の様相を呈する。森林の変化を感じることができるコース。										
山野草コース （距離：約550m）	自然との一体感を最も感じる事ができるコース。座観に適したポイントが多く、小川のせせらぎや樹冠より差し込む光、森の息吹に包まれる感触を味わえる。										

図-6 飯南町森林セラピーの内容（流れ）とコース

2) 今後に向けた課題（現場で認識されていること）

森林セラピーの利用者数は、平成21年度が約700名、同22年度が約800名、同23年度が約1,400名である。平成24年度は前年度を少し超える状況で推移している。利用者の属性は、「広島県：島根県：その他=5:4:1」の割合とのものである。

現場で認識されている今後に向けた課題点としては、セラピーロードの開発・バージョンアップ、ガイドのレベルとモチベーションアップがあげられている。当初、30代～40代の働く女性を主な顧客と想定されているようであるが、今後は、企業など、新たな顧客開拓をされる計画とのものである。

5. 飯南町における自然資源の活用方法について

5.1. 飯南町及び隣接する市町に存在する自然資源

飯南町は、その良好な自然環境や里山の暮らしを活かして、ブランド化戦略がとられており、「飯南高原」としてPRされている。一方、平成24年度末の松江尾道線の開通に伴い、飯南町内の交通量が激減すると予測され、高速バスもなくなるとのことで、地域活性化を行う上での大きな懸念材料となっている。

飯南町や隣接する雲南市、大田市、奥出雲町には、赤名湿性植物群落や県民の森などの自然資源が数多く存在している（図-7 参照）。また、飯南町は、島根県内においては、雲南市（特に旧大東町・旧加茂町）とともに巨樹・老樹が多い地域である。

これらの自然資源は、これまでも観光面において活用されてきたが、尾道松江線が開通するにあたって、更なる有効な活用方法について考察する。

表-5 巨樹・老樹の記載数

市町村名	巨木数	巨木林		合計	
		樹林	並木		
大田市	大田市	24	12	1	37
	温泉津町	4	0	1	5
	仁摩町	5	0	0	5
雲南市	吉田村	10	0	0	10
	大東町	44	3	0	47
	加茂町	21	3	0	24
	木次町	3	1	0	4
	三刀屋町	10	0	1	11
	掛合町	1	0	1	2
奥出雲町	仁多町	11	0	0	11
	横田町	10	0	0	10
飯南町	頓原町	16	0	0	16
	赤来町	13	4	0	17
合計		172	23	4	199
島根県全体		562	100	18	680
島根県全体に占める割合		5.2%	4.0%	0.0%	4.9%

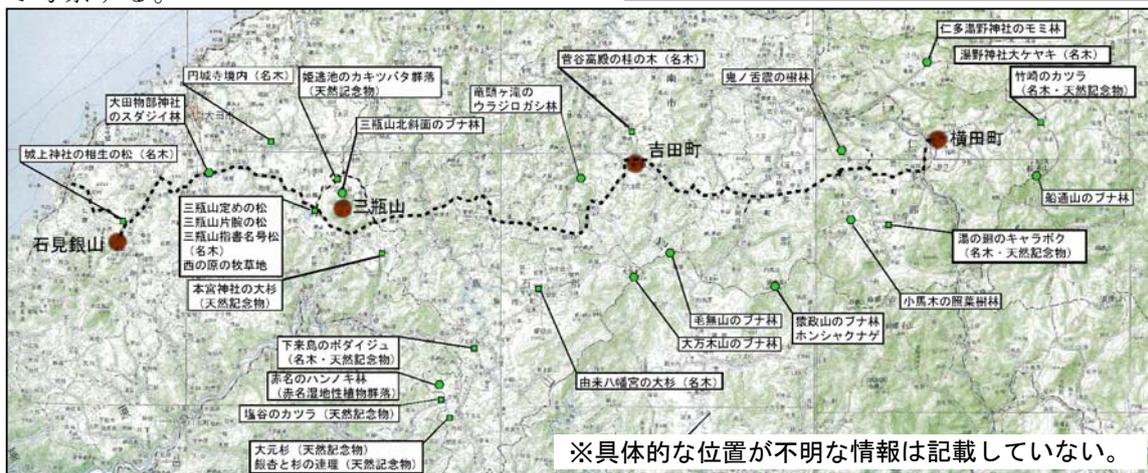


図-7 飯南町及びその周辺における主な自然資源

5.2. 自然資源の更なる活用・魅力アップに向けて

1) 赤名湿性植物群落

赤名湿性植物群落は、比較的狭いエリアに、自然性が高く貴重性の高い湿地性の植物群落と、薪炭林、人工林、耕作地などの里山的要素を持つ二次的な自然がコンパクトにまとまっており、潜在的、かつ多面的な価値を有している。また、島根県や飯南町とともに、地元の自発的な保護・管理活動が継続的に実施され、島根県立三瓶自然館、島根県中山間地域研究センターなどの機関が近隣にあることから、高齢化といった問題点はあるものの、保護・管理活動に必要な人的資源が存在する。

その中で、今後の更なる活用・魅力アップに向けて、以下のことを提案する。

《湿地の保護・管理の効果的手法の検討》

赤名湿性植物群落に関する既往調査は、湿地及びその周辺の植生・植物相を調査するなど、学術的な調査が主である。一方、懸念されている湿地の陸域化やヨシ等の繁茂

を解決するための手法については、「自然環境保全地域学術調査報告書（候補地）」（島根県）の中で、湿地の保護に向けた留意事項がとりまとめられているのみである。

湿地の保護に関する調査・研究は、岡山県自然保護センターで造成された湿地に関する調査をはじめ、平成10年代から多くの事例がみられ、湿地の保護・保全に係る知見・事例は比較的多い。本群落においても、これらの類似実績を参考に、効果的な保護・管理を行うための技術的な調査が必要と考える。特に、サギソウ、モウセンゴケ等が生育する開放湿地は、地形や地表面の状況から、粘土層などの不透水層からの湧水によって涵養される湿地（初生貧養型）の可能性が高く、沼沢地性のハンノキ林とは異なる要因で成立していると考えられる。攪乱に弱い植生のため、掘削などの破壊調査はできないが、多周波電磁探査（図-8参照）による地下のECを測定し地下水位等を間接的に把握することにより、新たな知見が得られる可能性がある。

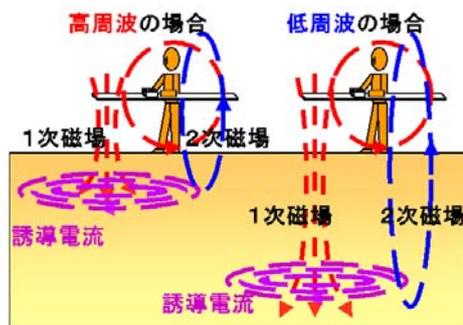


図-8 多周波数電磁探査の原理
（「多バンド電磁探査法による土壌モニタリング、平井・森、島根大学」）

湿地の成立・維持には、過湿、低温、強酸性、貧栄養など、一般の陸上植物の生育には不適な条件が重要とされる。より効果的な保護・管理手法を確立するため、それらの条件を技術的な視点で調査・解析することが望ましいと考える。

なお、具体的な検討プロセスについては、今年の2月に出版される本（湿地の保護活動を取りまとめたもので、新たな技術的知見もあると考えられる）の記載内容、島根県立三瓶自然館で進められている学術調査結果を参考に考えていきたい。

《周辺植生の管理計画の立案》

湿地の維持には貧栄養な水分供給が必要である。また、湿地（特に開放湿地）に生育する植物は日照条件の良さも成立条件となる。貧栄養な水分供給については、近年の薪炭林の放置により森林が発達し、落葉等の量も増えることから、湿地に供給される水は、過去と比較して富栄養になっている可能性がある。また、森林の発達（特に、湿地の南側にある斜面）は、湿地への日照量を低下させ、湿地植物の生育に影響を及ぼす可能性がある。

このように、湿地を効果的に保護・管理するためには、その流域を含めた管理が必要となる。湿地及びその集水域の代表的な箇所におけるEC、pHの簡易測定、周辺森林の分布や過去からの変遷（空中写真や地元の方へのヒアリングによる過去の植生の再現と現在との比較）を把握することは、湿原を維持するための森林管理手法の検討に役立つと考える。広島県にある八幡湿原の保護活動では、湿地に加えて周辺の森林管理についても検討されている。

一方、周辺の森林管理は、土地所有者の理解・同意が必要なこと、面積が広く管理コストが高くなると考えられることから、保護・管理者に加えて土地所有者との事前調整・意見交換を行うこと、林業・地域づくりなどの補助事業などの活用を踏まえた検討が必要と考える。

なお、これらの森林管理を検討する上では、隣接する「自然観察植物園・山野草の森」の活用（歴史などに関連づけて整理）を併せていくことが望ましい。

2) 飯南町森林セラピー（県民の森）

森林セラピー基地のある県民の森は、森林セラピーロードや登山道に関する資料は存在するが、近隣の女亀山、琴引山、大万木山や三瓶山を含めて、ブナ林などの豊かな森

林環境の魅力を伝える資料はみあたらない。

無名の巨樹・老樹・珍樹（変な形の木など）、きれいな草花（及び時期）、気持ちよい流れなど、様々な情報をまとめた（あるいはテーマ毎に異なる）マップを作成するなど、様々な価値観を持つ人に対応した情報提供を目指してはどうか。町民、常連客、一般客など、イベントを通じた情報収集（調査）を行うこともおもしろいかもしれない。

また、森林セラピーは、セラピーを目的とした企画が主であるが、ガイドには様々な知識・経験を持った方がいる。自然観察基地など、セラピー以外の基地も模索してはどうだろうか。マニアックな市場を対象とすると、交流圏はさらに広がると考える。

5.3. 今後に向けた取り組み

1) HPについて

飯南町のHPでは、「さとやまにあ」「飯南高原」などの楽しそうなコンテンツが多い。しかも、地元の方の実名・写真入りの魅力紹介は、説得力がある。一方、私のような自然環境興味派にとっては、“自然”とあっても、直接関係するコンテンツがない。飯南町にある自然資源の魅力を、もっとマニアックに紹介するページがあってもよいと思う。

2) エコツアー

数年前、エコツアーがブーム（名前だけ）になったが、「マーケット規模が小さい」などの理由で、思ったほど活性化していない。しかし、日本旅行業協会が行った意識調査によると、少なくとも中高年旅行市場ではすでにエコツーリズムを受け入れる基盤が成立しており、エコツーリズムのマーケットは非常に限定されているとの考えは改める必要があるとされている。また、「中高年は学ぶことが楽しいセグメント」、「大半がガイド同伴を希望。費用増を敬遠する傾向はつかめない」、「体力的には1日4時間・10km程度の平坦地であれば、徒歩OK」と示されている（コア年齢層は55～64歳代）。

飯南町には、すでに基盤となる自然資源は存在する。また、飯南高原などの気持ちのよい景観、歴史的な魅力も多い。後は、競合する地域との比較分析による差別化などの企画力を更に高め、それをオモシロイ形で発信する力が重要である。

3) 森の遊び場（プレーパークなど）

赤名湿地性植物群落に隣接する「自然観察植物園・山野草の森」は、単なる自然観察路ではなく、管理によっては子供の遊び場となりうる。環境を意識せず、自然の中で自由に遊ぶ経験は、結果的に自然の魅力を体で感じる感性を養うと考える。森林の現状を把握し、適切な植生の目標設定を行うことができれば十分可能であるし、森林セラピーのオプションとしても活用できる。なお、頓原の道の駅周辺では、プレーパークが開催されているが、「自然観察植物園・山野草の森」も、その誘致をしてはどうか。

6. おわりに

今年の活動は、諸々の調整に手間取り、よい時期に現地視察が行えなかった。しかし、来年の活動に向けて、様々な情報を得ることができた。自然環境を上手く活用するためには、環境部門だけでなく、応用理学・農業・林業・建設など、多様な技術部門の技術者の知恵が必要と強く感じた。来年度初頭に、現地視察の企画を予定している（予算もあります）。是非、多くの皆さんの参加をおまちしております。